

令和7年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月6日実施)	総合評価（3月19日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	○学習意欲の喚起を基軸とした教科横断的なカリキュラム・マネジメントに取組み、生きて働く知識・技能の習得及び学びに向かう力、思考力・判断力・表現力を育成する。	①確かな学力育成と生徒の学習意欲の向上のために、課題解決を中核とした単元計画を立て、教科の専門性と寒高アーツ(教科横断的に育てたい力)を活用した授業を考える。  ②個別最適化された学習の導入とデジタル教材の利用法について、研究を行う。	①育てたい力を念頭に学習評価を考え、その力を伸ばすための単元計画の中で、寒高アーツを意識した学習活動や ICT 機器等の活用、生徒への働きかけ方を授業のユニバーサルデザインの視点で見直し、わかりやすく取り組みやすい授業を行う。  ②1年次のマナベージックで、一人一台端末に対応したデジタル教材を導入し、個別最適化された教材を利用し、生徒の学習に対する理解度を高める。また、デジタル教材で得られた生徒の学習状況を教科指導に活用する。	①授業を通じて、生徒の能力が伸長したか。また、その評価方法が適正であったかの検証ができたか。  ②生徒の学習に対する理解度を高めることができたか。また、デジタル教材で得られた生徒の学習状況を教科指導に活用できたか。	①11月21日に実施した公開研究授業において、寒高アーツを意識した学習活動や ICT 機器等を活用した授業展開を行うことができた。また、その後の分科会での検討や全体会での研修を通じて、生徒の能力伸長の見とり方や評価に向けての検討を行うことができた。また、生徒による授業評価アンケートからは、1学期より2学期のほうが、各項目について高まっていた。  ②一人一台端末に対応したデジタル教材の導入を行い、授業に利用することができた。個別最適化された教材を利用した学習による効果について、アンケートを実施したところ、およそ75%の生徒から「自分で学習を進められるようになった」、「学習に対する意欲が高まった」という回答を得た。	①②単元計画やわかりやすく取り組みやすい授業展開については、生徒による授業評価アンケートにおいて高い評価を得ることができた一方、「自ら学習に取り組めたか」という項目は、他の項目に比べて低い傾向にある。教わることへの受け入れはできているが、まだ自分から進んで学習に取り組むには至っていないことがわかる。しかし、デジタル教材の導入が進んだマナベージックについては、達成状況にあるように、自ら学習に取り組む姿勢がはぐまれたことがわかる。  今後、生徒が自ら進んで学習に取り組む姿勢と身に付けられるように、デジタル教材の活用をさらに進める必要がある。	①多くの高校の課題であるが、学ぶ意義や目的意識を見いだせない生徒や家庭に対し、どのようにアプローチしていくか、様々な角度から取り組んでほしい。  ②個別最適な学びに関する肯定的なコメントは評価できる。初任者もICT機器の活用に取り組んでおり、試行錯誤していた。	①寒高アーツ(教科横断的に育てたい力)は、生徒に身に付けさせたい力が明確となり、すべての授業の基軸となった。生徒にとって、見通しが立てやすく、ねらいがわかりやすい授業に改善していったことが、授業評価アンケート結果であらわれた。  ②個別最適な学習について、一人一台端末の活用に焦点化し、厳選したデジタル教材をマナベージックで導入したことで、生徒個人が主体的に学ぶ姿が見られた。	①寒校アーツを基軸に、すべての科目が授業デザインを見直すことで、学ぶ意義や目的意識を見いだせない生徒も授業に参加できるようにしていく。  ②マナベージックで個別最適な学びを追求したことで分かったことを学校全体で共有し、主体的に学習に取り組む生徒が増加するよう、授業改善に取り組む。また教員同士の情報交換も盛んに行うよう促す。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①基本的な生活習慣を確立させ、規範意識を醸成するとともに、安心して学校生活を送れるように生徒の心のサポートを行う。  ②生徒が自ら考え行動する活動を通じて、責任感や連帯感の醸成と達成感が得られるよう生徒会活動を充実させる。	①生徒が安心して学校生活を送り、自ら生活を律する力を身につけることを目指す。そのために、教職員と生徒の信頼関係を基盤とした日常的な関わりの充実を図り、組織的な生活指導体制を通じて、課題の早期発見と未然防止を推進する。  ②生徒が困り感を安心して発信することができるよう環境を整え、生徒に寄り添った支援を行う。  ③生徒が主体的に特別活動に取り組む、他者と協働して成果を挙げることに伴い、自己肯定感を高めることができるよう支援する。	①日常的な声かけや登下校指導、交流当番などを通じて生徒との信頼関係を深め、情報共有や協働で生活上の変化に早期に気付く体制を強化する。また、服装・頭髪、交通安全、マナー等の基本的な生活習慣に関するキャンペーン指導を全教員の共通理解のもと実施することで、生徒の意識付けと規律の維持を図り、課題の早期発見・未然防止につなげる。  ②日頃の声かけや面談等をおして生徒が安心して相談できる関係を構築し、生徒の困り感を収集し、その解決に組織として対応する。  ③委員会活動や学校行事等の意義について、生徒の理解を深めることにより、生徒が主体的に取り組む姿勢を涵養し、その成果を評価することによって生徒の自己肯定感を高める。	①遅刻・欠席・服装指導などの対応件数や改善率、年間の指導実績を基に、課題を明確化できたか。また、生活習慣アンケートの結果から、生徒の学校生活に対する安心感や教員との信頼関係が変化したか。さらに、年間の指導記録や教員による振り返りを通じて、指導の効果や課題を定性的に検証できたか。  ②生徒が安心して相談できる環境が整っているか、また、生徒の困り感に組織として対応できているか。  ③生徒会活動、委員会活動、学校行事等をおして、生徒が達成感や満足感を得ることにより、自己肯定感を高めることができたか。	①基本的な生活習慣に関するキャンペーン指や日常のLHR等において、生活習慣の見直しの呼びかけを強化し、遅刻・欠席・服装指導の対応件数は、昨年度に比べ著しく減少した。生活指導件数についても、昨年度の約半数となった。(2月27日までで40件、前年比△46件)年間の指導記録の分析および職員による振り返りアンケートを実施し、次年度以降の生活指導体制を見直した。  ②日頃の声かけや面談を通して生徒が安心して相談できる関係の構築に努めた。生徒の困り感に寄り添い、その解決に向けてチームで取り組んだ。  ③生徒会が定期的に打合せを設け継続的に話し合いを行うことにより、学校をより良くするためにはどうしたらよいか自ら考え、行動する姿勢が窺えるようになった。	①来年度以降も「生徒支援の指針」と「生徒対応の手引き」を全教職員で共通理解のもと指導にあたる必要がある。今年度実績を受けて、規範意識の向上や基本的な生活習慣の確立に対して、より生徒がセルフマネジメントできるような指導方法、体制にしていく手だてや方策を検討する必要がある。また、生徒だけでなく、家庭にも事前周知を徹底するなど、家庭の理解や協力を得る取組みを着実に実行する必要がある。  ②家庭環境に起因する問題を抱える生徒が少なくなく、関係機関とのより良い連携が求められる。更なる生徒支援に向けて相互理解を深めていくことが必要である。  ③生徒の主体性を大切に、生徒が立案した計画を具現化できるようサポートすると共に、必要に応じて助言を行っていく。	①寒川高校に入学してくる多くの生徒は、褒められることに飢えているように感じる。褒めたり、認めてあげたりすることで、生活習慣を自ら整えようとする自己調整力を身に付けさせてほしい。  ②さわやかな笑顔と明るい挨拶により、多くの生徒と関係性を築いてほしい。また教員と生徒が一緒に悩み、課題に対して共に取り組む姿勢が重要となる。  ③生徒に自己肯定感を持たせるため、生徒のがんばりを多様な方法で情報発信してほしい。	①遅刻や欠席が多い生徒数は昨年比で減少したことから、基本的な生活習慣が乱れることなく、規則正しい生活を送ることができている生徒の割合が高くなっている。キャンペーンや日常の呼びかけにより、生徒は生活習慣が乱れないようセルフマネジメントの力を身に付けつつある。  ②生徒に丁寧に接する教員が多く、生徒が安心して困り感を話せるような一対一の関係性を築くことができた。  ③生徒が達成感を得られるよう、委員会や学校行事で生徒の自己肯定感が高まるようなサポートに一層取り組むことで、生徒の主体性を引き出していきたい。	①卒業後に円滑に社会参加できるよう、生活習慣を自ら整えようとする自己調整力を身に付けさせるため、日常の声掛けやHR活動での呼びかけを継続していく。  ②様々な困難を抱える生徒をチームで支援する体制づくりを構築する。  ③部活動では、合同チームであることを逆手に取り、他者と協働する力の育成を促す。

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月6日実施)	総合評価(3月19日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	○社会的・職業的自立のために、生徒に自己の在り方生き方を考えさせ、望ましい勤労観や職業観を基盤として主体的に進路を選択する能力を育成し、生徒一人ひとりの進路実現につなげる。	①生徒が自己の進路に対して主体的に向き合い、卒業時には適切な進路決定がなされるよう、細やかな進路指導を実践する。  ②多様な職業体験の機会を提供し、生徒が実社会との接点を通じて進路意識を深められるよう、学校全体で参加を促進する体制を構築する。	①1年次からの計画的なキャリア教育と3年次における個別支援体制を強化する。とりわけ進路未決定者への重点的な支援を実施し、卒業時の進路未決定率を10%未満とすることを旨とする。  ②地区インターンシップや仕事のまなび場などの体験活動や職場見学などを実施し、進路ガイダンスなどで体験活動の重要性を説明し、担任・学年団による個別案内や声掛けを促す。体験後の振り返りや発表をさせる。	①1・2年次の進路意識形成の取り組み状況や3年次の重点的支援の運用状況が向上したか。また、卒業時における進路未決定者の割合が減少したか。  ②学校全体での体験活動の案内や働きかけが効果的に実施できたか。また、全体の参加率、活動回数が増加したか。アンケートや振り返りを行い進路意識の変化や明確化につながっているか。	①1, 2年次では進路ガイダンス、学校調べ、自己理解など進路について考える機会を設けた。3年次は進路希望別に説明会や面接指導を行い、支援体制を強化した。また、進路が不明確な生徒へクラス担任から個別に声かけをし、進路活動を促した。その結果進路未決定者は7.5%と10%未満にすることができた。 ②年度当初に学年集会などで体験活動の参加を働きかけた。参加した生徒は自身の希望する進路を鑑みて、参加する事業所を選択するなど進路意識の向上につながった。	①1年次は進路意識形成のため知識、2年次は希望進路決定のため早めの意識付けをすることが必要であるので、各学年での目標を明確にして継続したキャリア教育を行っていく。3年次は個別の進路活動となるので個々の動向を把握する必要がある。未定者の多くは自ら就職も進学もしないことを決めている。保護者もそれを認めている場合が多く、未定者を減らすためには保護者にも意識を持ってもらえる取り組みが必要である。 ②年間を通してインターンシップなどへの参加を促し、募集期間を三者面談後に伸ばすなど応募しやすい環境を整える必要がある。	①生徒が社会的・職業的自立を目指して学び、将来にわたって働き続け、自分らしく生きることができるよう、社会人として必要な力を身に付けてほしい。  ②キャリアは、他者から与えられるものでなく、自ら構築していくのである。生徒には諦めず、次のステップに向けて粘り強く取り組んでもらいたい。	①生徒に丁寧に接する教員が多く、その積み重ねによって生徒が安心して相談できる関係性を築くことができた。卒業学年の生徒に対しても粘り強く対話したことで、進路先未決定者の割合が減少した。  ②学校外での体験活動は生徒の新たな姿が発見できる大切な機会であることを学年集会等で呼びかけたことで、進路意識の向上につなげようとした。	①本校の教員が積み重ねてきた生徒の特性に応じたきめ細やかな進路支援を継承し、進路先未決定者を出さない指導・支援を行う。  ②生徒が希望する進路に到達できるよう、粘り強く対話をするとともに、学校外での体験活動の参加によって自己理解を深めることができる意義と重要性を説明する等、参加者増加を図る。
4	地域等との協働	○寒川町唯一の高等学校として、寒川町や近隣地域、小中学校の期待に応え、地域に親しまれ、地域とともにある学校づくりを進める。	①中学生や地域に向けて、寒川高校の教育内容や魅力・特色を適切に情報発信する。  ②HP等に寒川高校について、理解しやすい情報を適切な時期に掲載する。	①潜在的・本質的に必要とされる、本校の教育活動の在り方を検証し、広報活動に取り込む。また、地域と連携した活動に取り組み、地域が寒川高校について知る機会を増やす。  ②寒川高校の様子がよりよく伝わるようにHPやSNSの内容を整理する。	①中学生や地域に潜在的・本質的に必要とされる本校の広報活動を展開することができたか。  ②HPに最新の情報を掲載し、更新することができたか。また、SNSでの情報発信を定期的に行う仕組みを継続運用できたか。	①学校の建物や、生徒が参加したのミュージックビデオ、テレビ番組、映画など、部活動や生徒の様子が伝わる撮影に協力することで、地域の広報に貢献すると共に、参加する生徒により体験となった。寒川町撮影協力は今年度は5回、7日の撮影が行われた。 ②SNSなどを利用して、学校の様子をこまめに情報発信することができた。	①生徒も体験や参加できるよう、地域貢献を増やす。また、中学生へ向けて、本校の特色をより効率的かつ、理解しやすく発信できるように、次年度に向けて検討する。  ②SNSへの情報の掲載を分担して行い、より早い発信ができるように検討する。	①防災講話の事後アンケートでは、避難所で自分ができることを考えている生徒がおど、地域社会に貢献しようとする生徒が育っていると感じた。  ②よいPR活動が実施されていて、評価できる。	①寒川町からの撮影依頼に積極的に協力し、本校の部活動等多くの生徒が関わることで、地域の広報にも貢献した。また合唱部、演劇部、野球部が地域連携で県から表彰を受けた。  ②SNSなどを利用して、学校の様子をこまめに情報発信することができた。	①地域への情報発信方法の工夫を模索する。また、地域のニーズと生徒の特技やスキルのマッチングを図る。  ②HPの情報を新しく更新する。また、SNSでの情報発信を定期的に行い、受検を考えている中学生や保護者に情報が届くようにする。
5	学校管理 学校運営	○事故・不祥事防止を徹底し、地域から信頼される学校づくりに努め、持続可能な学校運営と生徒に寄り添った教育を継続するための「働き方改革」を推進する。	①施設等の管理・調整や学校全体の業務時期の調整を行うことで「働き方改革」を推進する。  ②風通しのよい職場環境を推進し、継続して事故・不祥事防止に取り組むことのできる環境を作る。	①業務の効率化の視点を持ち、施設設備の管理や各グループの業務時期の調整を行うことで、持続可能な効率のよい学校運営に取り組む。  ②職員が、継続して事故・不祥事防止に取り組むことができるよう、業務効率化を推進し、ゆとりある職場環境を作る。	①業務効率化の視点から調整を通じて、効率のよい学校運営を進めることができたか。  ②職員が、事故・不祥事防止に対して、積極的に取り組むことはできたか。	①業務効率化と働き方改善を推進するために、オフィス改善を進めた。職員室の背の高いロッカーを壁際に寄せることで、職員室内を見通しよくなるよう配置し、開放的な職員室をめざすことができた。また、個別のロッカーを購入し、書類を保管しやすい環境になるよう計画を立て、来年度整備される予定となっている。 ②業務時間の調整を図るため、年間の行事のバランスよく調整を行う努力ができた。各施設の整理整頓を行い、業務を効率的に行えるよう内容を精査するなど職場環境の改善を図ることができた。	①来年度、オフィス改善計画が実施されるため、8月に向けた準備計画を進める。  ②事故防止・不祥事防止のために、業務の効率化をいっそう図り、職場環境にゆとりを作る。	①安全、安心、快適な教育環境を構築してほしい。  ②風通しの良い職場環境であることがうかがえた。	①業務効率化と働き方改善をセットで推進するため、働きやすい職場環境への改善の視点で、教員の目線を遮る障害物を除く等のレイアウト変更を行い、教員同士が気軽に対話できるよう環境調整を行った。  ②事故・不祥事を未然に防止するためには、業務をより一層効率化し、一人ひとりの業務にゆとりを作る必要がある。	①働きやすい職場環境について、多くの先生の意見を取り入れ、オフィス改善に引き続き取り組む。また、業務の見え化と仕分けに取り組む。業務改善を進める。  ②教職員同士が、こまめな声かけと、気になったら伝える「ちょっとのお節介」ができる協働的な関係性を築くことで孤立を防ぎ、事故・不祥事の未然防止とする。

